地域子育て支援拠点研修事業＜東京開催＞
中堅支援者向け研修

≪開催概要≫

◇開催日：平成 24 年 10 月 21 日（日）　10：00～16：30

◇会場：東京ウィメンズプラザ（東京都渋谷区神宮前 5-53-67）

◇主催：財団法人こども未来財団・NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会

◇後援 ：厚生労働省・（社福）全国社会福祉協議会・東京都・子育て応援とうきょう会議

◇協力　：ゆったりーの運営委員会

◇参加者数：154 名

（行政 36 名、NPO/任意団体 95 名、他団体/企業 18 名、その他 5 名）

≪プログラム≫

◇主催者挨拶　押本 篤良さん 財団法人こども未来財団 事業部研修調査課

◇開会挨拶　松田 妙子さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事

プログラム１　基調報告

「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

黒田 秀郎さん （厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長）

子ども・子育てビジョン及び先日成立した子ども子育て関連３法のポイント

国の進めてきた少子化対策も保育も大事だが、子ども･子育てビジョンの柱の一つとして、地域子育て支援の視点が入ってきた。そして、制度の縦割りの問題や財政問題をクリアにする議論を経て、先の国会で新しい法律が成立した。子育て関連 3 法では、幼児期の学校教育、保育、地域の子ども・子育て支援の 3 つの柱を総合的に推進していく。管轄や法律が細切れに分かれているものを一体化する仕組みを作り、まとめて市町村にお願いする、ということがポイントになっている。

子ども子育て会議について

有識者、子育て当事者の方にも入っていただき、子ども・子育て会議を内閣府に作る。これは、自治体にも設置努力義務がかかっている。25 年度以降、この会議がどうなっていくかということ、国の動向や自治体の動きに注目していただきたい。「自治体ではどこで議論するのか？」「どんな場でどういう風に議論するのか？」「私たちが入れないか？」ということを、皆さんからも言っていただきたい。

利用者支援機能強化について

新制度への移行に伴い、色々なメニューができ、利用者がどれを選んだらいいか迷うと思う。情報を収集してわかりやすく提供すること、また、一般的な情報のほかに、それぞれの親の目線で敷居を低くして対応する担い手として、地域子育て支援拠点の支援者の皆さんに期待している。

プログラム２　分科会

＜第1分科会＞「地域との関係づくり～地域子育て支援拠点はどう地域とつながるか」

【コーディネーター】松田 妙子さん　(NPO 法人せたがや子育てネット　代表理事)
【パネリスト】　　　新澤 拓治さん　(社会福祉法人雲柱社 施設長)
【パネリスト】　　　片桐 誠さん　　(世田谷区砧総合支所生活支援課長)
【パネリスト】　　　大矢 裕子さん　(社会福祉法人二葉保育園・
地域子育て支援センター二葉　地域活動ワーカー)

パネルディスカッション

世田谷区砧総合支所生活支援課長　片桐さん

主に虐待の対応を担うために生活保護や DV の問題にも対応し、母子保健もカバーするワンストップ型サービスの機能を持つセンターの現状を説明。問題を抱える多くの家庭が地域とのコミュニケーションがとれていない実情が、年間 600 件の相談から浮かび上がっており、子ども家庭支援センターとしても地域とのつながりが課題。

地域子育て支援センター二葉　地域活動ワーカー　大矢さん

乳児院に併設した子育てひろばの事業に加えて、2009 年に立上げた「よんこれん」について説明。四谷という中学校区程度の地域の中で、幼稚園・保育園・保健センター・子育て支援ひろば運営団体・冒険あそび場などが、情報の共有、四谷地域の資源の有効活用のために連携し、年 2 回の話し合いと 1 回のイベントを行う。支援者同士が、顔が見えるつながり作り、それぞれの特徴、専門性をいかした活動を展開。楽しむことを忘れないことも大事。

社会福祉法人雲柱社施設長　 新澤さん

東京都の子ども家庭支援センターは総合的な相談をなるべくひとつのところで対応するためにできた独自の取り組み。今後国が各拠点に地域の中でのコーディネート機能を求めることに対し、考えるべき点が多々あると指摘。拠点利用者は地域を越えてやって来る人も多く、ひろばの土着性・居場所性を求めるのが難しくなっている。拠点に地域の開発や援助・応援という機能まで求めるには、専門的な人材が必要になる。統計には出てこないが、地域のボランティアが街の中で顔見知りの親子に何か声をかける程度の身近な支援をもっと評価すべき。

グループワーク

「地域」と言って何を思うか？

利用者が思っている地域と、行政が思っている地域が違う。お互いが考えていることを知ることも拠点の役割である。

「拠点のスタッフとして、どことつながっている、誰とつながっているか」
「そもそもどうして地域とつながるのか」
といったテーマに続き、
「拠点として何が出来るか、拠点スタッフとしてできること、やらなくてはいけないこと」についてグループで検討。

・人と人をつなげる。その中で異世代が互いに理解しあう。
・子育て世代の利用者さんが次の運営を担っていくこと。
・地域と拠点・利用者が出会えるお祭や出前ひろば。赤ちゃん授業。
・支援者同士がネットワークをつくること。
・地域の回覧板などを利用して、拠点に来られない人に対しても発信をしていくこと。
・外部の情報をその人に適切に伝えるコーディネート。
・自分自身が地域を知っていくことが大事。自分たちのスキルアップ。
・相手の立場にたって、一人ひとり求めているものに添って対応していくこと。
・世代間交流も含めて子どもの将来を創造することが出来る場所。見守られている安心感。

最後に**「つながるために明日からやること」**をみんなで確認した。

まとめ

片桐さん

「ひろばのスタッフの皆さんが多方面とのつながりを持ち、いろいろなアイデアをもっていることを知って勉強になった。今後の活躍に期待したい」

大矢さん

「色々な立場でみな悩んでいることは、そこを共有することで救えることもある。予算も実績を作ることでついてくることもあるので、諦めずにつながり続けてほしい。」

松田さん

「区境にブラックポケットがあることが多い。サービスの空白を知り、隙間を埋めていくにはどうしたらいいか、誰が動くのがいいか考えていくことが大事。そこが地域の拠点にできること。」

＜第2分科会＞「地域子育て支援拠点における相談をどう考えていくか」

【講師】 福川 須美さん（駒沢女子短期大学 教授）

【講師】 原 美紀さん（港北区地域子育て支援拠点どろっぷ 施設長）

拠点では、親から相談を受けたり、心配な親がいたり、ひろば内で解決できる相談もあれば、関係機関と連携しなければ解決できない相談もある。相談と一言で言っても様々だが、今日は日々相談に携わるスタッフがどう実践しているかをみんなで共有し、深め合うことを分科会の目的としたい。問題があると、どうしたらいいかをすぐに考えがちであるが、どうしてそうなったのか、なぜそうするのかを考えてみる必要がある。経験学習サイクルの使い方を学び、持ち帰ってほしい。

グループワーク

「経験した相談内容」から話し合いたいこと、悩んでいること、困った相談ごとを書き出し、話し合いながら、分類する作業を行った。次に、経験学習サイクルの説明を聞き、グループごとに出し合った課題の中から話し合う事例を決め、経験学習シートを活用して話しあった。

・母は子育てに自信を持っているのだが、客観的にみると気になる親子。
・他の子どもに乱暴してしまう我が子に注意はするが、どのように対応したらいいのか迷っている母。
・食事の時にイライラしてしまう母。
・他の子どもに叩かれても何も対応できない我が子に対し、悩みを抱える母。
・些細な悩みを何でも相談する母。
・母が自己決定できない為、生活リズムに影響が出てきてしまっている親子。

と、話し合われた事例はグループにより様々だったが、

・直接、母に思いを伝えるのではなく、スタッフと子どもが楽しく遊ぶ姿を見せ、母自身が子どもとの関わりを振り返り、気付けるような仕掛けをする。
・スタッフは子どもの気持ちを言語化し、母の気持ちも代弁し、共感していく。また、他の利用者にも投げかけ、提案してもらったり、みんなで考えてみる。
・他の親子の食事の様子を聞いたり、母自身の食事を振り返る機会を作るなど対応の幅を広げ、母自身に気付いてもらえるよう関わる。
・子どもでなく、母自身の特性をスタッフに理解して欲しいという親の気持ちを受け止める。
・相談を受けた個人ではなくチームとして考え、どの様に対応していくか、体制を組む。
・「あなたはどうしたいの？」と問いかけて母自身が自己決定し、成功体験を重ね、自らに自信を持てるように対応していく。
・親同士の学び合いも大切。他の親の経験も、判断材料となる。

など、親の気持ちに寄り添って、親自身が気付いたり、主体的に考えたりすることを見守っていく大切さが話し合われた。

港北区地域子育て支援拠点どろっぷ 施設長 原さん

・相談する相手や時期、タイミング等の権利は親に委ねることが拠点での相談業務の生命線。気になる親がいても、すぐに相談に誘うことはしないで、辛抱強く伴走していくことが使命だと思う。
・母子家庭・父子家庭や障がいを持つ子どもの親等の場合、通院や行政への相談への付き添い等は、本来ひろば事業の範疇外の対応と捉えられがちであり、リスクを伴うケースもあるが、それを理解した上で関わることもある。親の状態次第で他機関との繋がり等が途切れることもあるので、事実確認して具体的な手立てができるよう模索している。
・“つくって、つなげて、ひろう”という三原則を徹底的に行う。プログラムの企画時には「この人のため」と具体的な対象者を決め、参加前、参加中、参加後の親子の様子を丁寧に、連続的に見ていく。
・学童期の子どもも含めたプログラムは支援も範疇外という意見もあるが、その親たちがセンターに関わることで、乳幼児の親に子育ての道筋としてどれだけ勇気を与えるかということを説得しながら活動を進めてきた。様々な就学の形、生き方のどれもがその親子が選択し納得している姿だと、地域の中で認め合える場を創っていきたい。
・子どもを産んだことで自分の生育歴が紐解かれ、今まで押し隠してきた辛いことに直面する親が多い。どのような診断名がついていても、その人の意思を尊重し、そのままの姿を受け入れて、地域の中で生きていく日常生活を支える。
・一緒にどうしようと悩んでくれる人が側にいないから寂しいのであって、私たちはとことん一緒に悩み、振り回される存在でいようと思う。
・地域にあり続ける拠点として、その人自身の暮らし全般をどのように支えるかを模索し、親や子の力を信じ切り、人や家庭と共に育っていく支援センターでありたい。

駒沢女子短期大学 教授 福川さん

・子育て困難な現代にあって、ひろばの果たしている役割は進化している。常に親子が来て、楽しくだけではない、親のエンパワメントが必要。
・親の気持ち、不安に付き合い、誰が支えるのか。聞いてあげることが重要である。聞いてもらえる人が安心し、構えないで話せるような傾聴は、簡単なことではないがとても大切で、ひろばスタッフの大きな専門性である。

・スタッフには、親をとことん信頼し自己決定を任せるスタンスが求められる。
・親のしていることにはなんらかの理由があり、自分の価値観で聞いてしまわないことが大切である。そのためには自分を理解し、見つめる機会を持つスタッフ研修が重要であり、他の考え方の人に出会うことで自分のこともよくわかる。

まとめ

原さん

「子育て支援は乳幼児の大事な時期に関わる責任のある仕事だが、自分の価値観が拡げられる崇高な仕事だとも思う。親を信頼するということを何より大事にし続け、いつか支えたことが糧となり力を発揮してくれると信じたい。親を信じ貫いていくひろばであり、その上に成り立つ相談事業でありたい。隣のおばちゃん的にしか話を聞けないけれど、今の時代、『隣のおばちゃん的関わり』がとても難しい専門性なのだということに自分たちのやりがいを感じ、関わりを持っていきたい」

福川さん

「とことん支えることが大切だが、いろいろなひろばがあり、スタッフがいて、原さんのように覚悟を持って、とことん支えることは難しいかもしれない。今できることをそれぞれがやることが大切。」

＜第3分科会＞「地域子育て支援拠点におけるリスクマネジメント」

【コーディネーター】 奥山 千鶴子さん（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長）
【事例報告】 佐竹 直子さん （NPO 法人多世代交流館になニーナ 代表理事）

東日本大震災後、それぞれの拠点において「防災」が話題の中心となったが、災害だけでなく、事故、クレーム・苦情など、子育て支援の日常には数多くの“リスク”が存在する。そうしたリスクが発生した時、どのように対応すべきか。日頃から備えておくべき事、自分たちが果たすべき役割は何なのか。事例の報告や具体的なグループワークを通じて、話し合った。

NPO 法人多世代交流館になニーナ 代表理事　佐竹さん

・1999 年から「長岡子育てライン三尺玉ネット」を立ちあげ、人々を「つなぐ」ための活動をしてきたが、2004 年の中越地震大震災時、母子が避難所で「人の迷惑にならないように」と遠慮し、避難所からも出ていくような状況を目の当たりにして、「母親同士 or 子育てに関心がある人同士でつながるだけでは、子どもを『地域で育てる』ことの実現は難しいのではないか」と考えるようになった。
・そこで、仮設住宅の跡地に「多世代・多文化・多分野・多領域」での交流が可能な、「多世代交流館になニーナ」を立ち上げた。そこでつくられる「ゆるやかなつながり」が、いざという時の力になり、子育て世代が安心して暮らせる街になると信じ、子育て世代だけでなく、どんな人たちも交流出来るような「サロン」を大切に、活動を行っている。
・災害時の子育てをサポートするためには、平常時の人々の特性を把握しておく。
・災害時に困る人は、災害の起きていない普通の社会でも困っている人である場合が多い。普段から住みやすい社会を作っておくことが、「災害に強い社会」を作ることにつながり、また、普段から備えておくことが、「減災」につながる。

リスクマネジメントの具体的活動例

になニーナでは、「子育て防災支援資格」を作った。**「あんしんの種」**（防災支援資格用テキスト、災害時にどう動くか、頼りになるものはなにか、準備しておくものは何か、といった内容が盛り込まれている）、**「あんしんの芽」**（ワークシート型、“自分の家用の防災テキスト”を独自に作れる仕様）という防災支援テキストを作成。これらのテキストは、専門的情報が盛り込まれすぎたマニアックなものではなく、「母親の目線で」作成されたものであり、母親たちが経験の中で感じたことが、その内容にしっかりと反映されている、という特徴がある。

東日本大震災における対応

長岡市は、キーマンとなっていた人々の間で平常時からつながりが作られていたので、東日本大震災においても行政よりも早く対応できたとのこと。最大の防災力は、やはり「つながる力」である。

グル―プワーク

各グループ１つの「リスク場面」の事例が提供された。具体的には、苦情電話、利用者同士のトラブル、子どものケガ、不審者対応、ものの紛失（盗難の可能性あり）が起こった時の対応など。

各グループにおいて、

1.「リスク場面」の中に出てくる登場人物の「気持ち」について考え、話し合ったうえで、
2. スタッフはどう対応すべきか、
3. その対応を実現するための備えとして出来ることは何か、について話し合われた。

まとめ

奥山さん

「リスク場面に遭遇した場合には、責任をもって冷静に対応していかなければならない。そのためにもリスクをある程度想定しておくこと、また事件・事故が起きた時に、関係者の思い、背景、対応方法の振り返りをきっちり行うことが重要である。今回のグループワークを踏まえ、ひろばのリスク管理について、それぞれ現場で考える一助としてほしい。」

佐竹さん

「これらの『リスク場面』は、『ピンチ』ともとれるが、『ピンチ』は改善のための『チャンス』でもあるので、前向きにとらえて行くことが重要」

プログラム３　全体総括・ディスカッション

【コーディネーター】　福川　須美さん（駒沢女子短期大学 教授）
【パネリスト】　松田　妙子さん（NPO 法人せたがや子育てネット　代表理事）
【パネリスト】　原　　美紀さん（港北区地域子育て支援拠点どろっぷ 施設長）
【パネリスト】　佐竹　直子さん（NPO 法人多世代交流館になニーナ 代表理事）

第１分科会　「地域との関係づくり～地域子育て支援拠点はどう地域とつながるか～」
（松田さん）

拠点には、生の声を拾える強みがある。それによって現状を知ることが、次の支援につながっていく。しかし、そういった作業はとても地味で、「魔法の杖」はない。関係性は、少しずつ積み重ねて行って出来てくるもの。その積み重ねをして、人と人とをつなげ、多世代が理解し合い、地域まるごと信頼していくことが重要である、ということを再確認した。

第２分科会　「地域子育て支援拠点における相談をどう考えて行くか」
（原さん）

持ち込まれた相談を題材に「出来事、事実の確認、意味を考える、次どうするか」について整理し、出来事をただ受け流すのではなく、その「意味」まで深く考えることが重要であると確認し合った。カウンセラーが出来ない、子育て支援拠点スタッフだからこそできる相談のスタイルがある。それは、「ただ話を聞いてあげる」ということ。これが、実はとても難しく重要な専門性なのではないか、という意見が出た。

第３分科会　「地域子育て支援拠点におけるリスクマネジメント」
（佐竹さん）

ゆるやかなつながり、「お互いさま」の関係づくりが、「減災」につながる。日常のひろばで起こり得るリスクのマネジメントに関しても、ハード面のセキュリティ等が出来れば良いが、それは難しいので、やはりソフト面でカバーする必要があるだろう、という結論になった。

福川さんによるまとめ

子どもは、実は人をつなぐ、大人をつなぐ存在である。子育てを核にした、多世代の地域のつながりというのは、これからとても大事になる。子どもがいない人も、つなげていく必要がある。どうやって巻き込むか？ということを、常に意識しておく必要がある。

ひろば全体の質をあげていくためには、「人生の伴走者」として走っていくとは何なのか、ということをしっかりと考え、専門的なスキルとして身につけていくことが重要。そういう、「地域子育て支援の専門性」の最前線を走っているのがこの研修会である、とも言えるだろう。